

ルカの哲学的風味に対する哲学的吟味 ——使徒言行録 17章 16～34節「アテナイのパウロ」の叙述——

三上 章

キーワード：使徒言行録、アテナイ、パウロ、プラトン、エピクロス
Acts, Athens, Paul, Plato, Epicurus

はじめに

この論文は、使徒言行録 17章 16～34節の「アテナイのパウロ」の叙述をギリシャ語古典テキストとして読み、その中でルカがかもし出している哲学的風味を、特にソクラテス風パウロ像と当て馬的エピクロス派像において際だつそれを哲学的に吟味する試みである。ギリシャ語古典テキストとして読むということは、あまたあるギリシャ語古典の一つとして読むということである。哲学的に吟味するということは、ルカが哲学的なことがらに言及している以上は、しかもかなりまじめに言及している以上は、それを真摯に受けとめ哲学的に吟味せざるをえないということである。

小論は、以下の二つの論文によって触発された。一つは、D. M. Reis, “The Areopagus as Echo Chamber: Mimesis and Intertextuality in Acts 17”¹である。Reis は、ルカのテキストはソクラテス的文学の伝統に基づくミメシスであるという観点から²、ルカのパウ

1. *The Journal of Higher Criticism* 9/2 (Fall, 2002) 259-277.

2. D. M. Reis, “The Areopagus as Echo Chamber: Mimesis and Intertextuality in Acts 17,” 270: “If the literary and structural parallels between Luke’s text and the Socratic literary tradition are accepted, then it becomes possible to view the former as a work of mimesis based upon the latter.” 17章のみならず使徒言行録全体にソクラテス的パウロ像が見て取れるという見解については、cf. D. R. MacDonald, “Apocryphal and Canonical Narratives about Paul,” in *Paul and the Legacies of Paul*, ed. W. S. Badcock (Dallas: Southern Methodist University Press, 1990) 64.n.39. MacDonald は以下の対応点を指摘する。①ソクラテス：アポロンの託宣による劇的転換—パウロ：復活したイエスとの出会いによる劇的転換。②ソクラテス：知恵の探求においてだれとでも問答した—パウロ：ユダヤ人を始めギリシア人にも布教した。③両者ともに社会秩序を脅かす者とみなされ、その一徹さのため苦難を身に受けた。④ソクラテス：死後の運命への楽観主義—パウロ：復活の大胆な布教。

ロ像はソクラテス化されたパウロ像であるとともに、パウロ化されたソクラテス像であることを明らかにした³。もう一つの論文は、J. H. Neyrey, “Acts 17, Epicureans and Theodicy: A Study in Stereotypes”⁴である。Neyrey は、現代の学者にはめずらしく、ルカが使徒言行録17章において言及するエピクロス派（新約聖書におけるエピクロス派への唯一の言及）に注目し、特に神慮と弁神論を否定する者たちとして描かれたエピクロス派像が巷に流布していたステレオタイプな見方であることを明らかにした。

両者の見解はおおよそ妥当であると思われるが、小論筆者の関心は、翻って、ルカが叙述するパウロ像とエピクロス派像を、それぞれプラトン哲学とエピクロス哲学に即して吟味するならば、それらはどれくらい妥当性を有するであろうかという問題である⁵。それを解明することが小論の目的である。それではテキストの分析作業に入ることにしたい。

お膳立て

17:15

οἱ δὲ καθιστάνοντες τὸν Παῦλον ἤγαγον ἕως Ἀθηνῶν, καὶ λαβόντες ἐντολὴν πρὸς τὸν Σίλαν καὶ τὸν Τιμόθεον ἵνα ὡς τάχιστα ἔλθωσιν πρὸς αὐτὸν ἐξήρῃσαν.

3. D. M. Reis, 277.

4. D. Balch and W. Meeks, eds., *Greeks, Romans, and Christians. Essays in Honor of Abraham J. Malherbe* (Minneapolis: Fortress, 1990) 118-34. とはいえルカの手元にプラトンやクセノポンのテキストがあったと考える必要はない。Cf. D. M. Reis, 272: “he had simply ‘recalled’ Socratic vocabulary from antiquity’s ‘general text’.”

5. プラトン哲学とエピクロス哲学に即して吟味するということは、プラトンの著作とエピクロスの著作に即してルカのテキストを吟味するということである。プラトンの著作については周知のことであり、説明を省略する。エピクロス（Ἐπίκουρος, 前341～前271）の著作は300巻に上るが、現存しているものはわずかである。ディオゲネス・ラエルティオスが『哲学者列伝』(*Vitae philosophorum*)の第10巻「エピクロス伝」に収載した三つの書簡、『ヘロドトス宛書簡』(*Epistula ad Herodotum*)、『ピュトクレス宛書簡』(*Epistula ad Pythoclem*)、『メノイケウス宛書簡』(*Epistula ad Menoeceum*)。これらの書簡に加えて、ディオゲネスは40の『主要教説』(*Kyriai doxai*)を伝えている。さらにヴァチカン写本中には、『ヴァチカン箴言集』(*Sententiae Vaticanae*)が残っている。また、18世紀に行われたヘラクランエウムの発掘によって発見されたバビロンの巻物には、エピクロス『自然について』(*De natura*)の数巻の断片や、キケロと同時代に活動したエピクロス派の哲学詩人、ガダラのピロデモスの著作の断片も含まれている。

エピクロスの教説の詳細については、ローマの詩人ルクレティウスの『事物の本性について』(*De rerum natura*)、キケロの『善と悪の究極について』(*De finibus bonorum et malorum*)、『神々の本性について』(*De natura deorum*)、『トウスクルム荘対談集』(*Tusculanae disputationes*)、プルタルコスの『迷信について』(*De superstitione*)、『エピクロスに従っては、快く生きることは不可能であること』(*Non posse suaviter vivi secundum Epicurum*)、『コロテス論駁』(*Adversus Colotem*)、セネカの『倫理書簡集I』(*Epistulae Morales*)などがある。

パウロの警護を任された人たちは、彼をアテナイまで導いた。そして、シラスとティモテオスへの「できるだけ早く私のところへ来るように」との指示を受けて、帰途についた⁶。

「警護を任された人たち」(οἱ δὲ καθιστάνοντες)：危害を加えようとする者たちからパウロを守るために警護を任された人たちを意味すると思われる⁷。

「アテナイ」(Ἀθηνῶν)：当時、アテナイは往年の栄華こそ失っていたが、タルソス及びアレクサンドリアと並んで世界の三大学問都市の一つであった。これからルカは、このギリシア文化の象徴である都市を舞台に、使徒パウロを主役とする叙述を展開する。

「(パウロの警護を任された人たちは) 帰途についた」(ἐξήεσαν)：孤高の人としてアテナイに乗り込むパウロを叙述するためのお膳立てが整ったといえよう。

1 演説の伏線 (17:16-21)

1.1 再来のソクラテス=パウロの靈的覚醒 (17:16)

17:16

Ἐν δὲ ταῖς Ἀθήναις ἐκδεχομένου αὐτοὺς τοῦ Παύλου, παρωξύνετο τὸ πνεῦμα αὐτοῦ ἐν αὐτῷ θεωροῦντος κατείδωλον οὔσαν τὴν πόλιν.

パウロは、アテナイで彼らを待っているあいだ、このポリスが偶像・彫像だらけであることを観察するにつれて、彼の内でその pneuma が覚醒されはじめた。

「さてパウロは、アテナイで彼らを待っているあいだ」(Ἐν δὲ ταῖς Ἀθήναις ἐκδεχομένου αὐτοὺς τοῦ Παύλου)：パウロは、古都アテナイでシラスとティモテオスが来るのを待つあいだも、気を抜くことはなかった。それゆえ「彼の内で彼の pneuma が覚醒されはじめた」(παρωξύνετο τὸ πνεῦμα αὐτοῦ ἐν αὐτῷ)：「覚醒され始めた」(παρωξύνετο) の未完了過去は、起動の意味にとるのがよいと思われる。パウロの靈的覚醒は、ソクラテスを連想させる。ソクラテスが哲学的問答の生活に踏み出したきっかけは、アポロンの神託に促されて自他を吟味することの急務に目覚めたことであった⁸。またパウロの靈的覚醒は、広くとらえれば、

6. ギリシア語テキストは *Thesaurus Linguae Graecae (TLG)* 収録のものを用いた。邦訳は、基本的に小論筆者自身によるものである。

7. Liddell and Scott, *Greek-English Lexicon*, 9th edn., rev. H. Jones (LSJ) : “to be set as guard.” Cf. Herodotus, *Historiae*, 7.59; Xenophon, *Anabasis*, 4.5.19.

8. Plato, *Apologia*, 20E-22A. Cf. J. W. Jipp, “Paul’s Areopagus Speech of Acts 17:16-34 as Both Critique and Propaganda,” *Journal of Biblical Literature* 131, no. 3 (2012) 570: “Luke characterizes Paul as Socrates redivivus.”

ソクラテス的な「魂の向け変え」⁹にたとえることができるかもしれない。ただし、*παρωξύνετο*は、文脈上では否定的感情を意味すると思われる¹⁰。ムム、グググ、ムラムラといった怒りの情動か。それにしても屈折した言い方である。なぜルカは直裁にパウロは怒った¹¹といわないのであろうか。エピクロスの観点からは、その理由がわかるような気がする。エピクロスの理想は、心が何ものにも動揺しないこと、すなわち「平静心（*ἀταράξια*）」であった¹²。彼が想念する神は、怒りや感謝の感情に動ずることのない神であり、同様に人間も怒りの感情に動じないということがエピクロスの理想であった¹³。ルカがここでエピクロスの教説を意識していたと仮定するならば、怒るパウロ像はエピクロス派に批判の口実を与えることになりかねない。しかしながらテキスト分析のこの段階でルカがエピクロス派を意識していたかどうかを、決定することができない。むしろ意識していたとすれば、ストア派の「不動心（*ἀπάθεια*）」のほうの可能性が高い。

「観察するにつれて」（*θεωροῦντος*）：哲学的な精緻な観察を示唆する言葉である。暇にまかせて、ぼんやりながめていたということではない。

「このポリスが彫像だらけである」（*κατείδωλον οὔσαν τὴν πόλιν*）：「彫像だらけである」（*κατείδωλον*）は *hapaxlegomenon* であり、「崇拜の対象としての彫像・偶像」に言及する。アテナイ人の観点からは「彫像」であるが、ルカの観点からは「偶像」ということになるであろう。ルカの彫像に対する否定的な見方¹⁴は、偶像礼拝を弾劾したヘブライ預言者たちの系譜に連なる見方である。エピクロスの見方はどうであったかという、彼は民衆を惑わすさまざまな迷信を弾劾したが、神々の彫像を排斥することはなかった。ケクロが伝えるところでは、神々は「人間と同じ姿」をしており、それが「万物の中で最も美しい姿」であるというのが、エピクロスの考えであった¹⁵。それはとりもなおさずアテナイ人にも共通する宗教感覚であったと思われる。どうもルカは、アテナイ人を理解する感受性を持ちあわせていないようである。ポリス全体がギリシアにおける父祖伝来の宗教的雰囲気満ちているとい

9. Plato, *Republica*, 521C.

10. 使徒言行録 15:39では、この動詞の名詞形は「激しい論争」（*παροξυσμός*）を意味する。Cf. J. W. Jipp, “Paul’s Areopagus Speech,” 570.

11. *παρωξύνετο*は、怒り、悲しみまたは布教心を意味するが、ここでは怒りであろう。BAG, 789. Cf. R. I. Pervo, *Acts: a Commentary* (Minneapolis: Fortress Press, 2009) 426.

12. その根底にあるのは、情念に動じることがない神という観念である。Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum*, 10. 139.; Cicero, *De natura deorum*, 1. 85; Lucretius, *De rerum natura*, 1. 44-49, 2. 651; Herman Usener, *Epicurea* (Stuttgart: Teubner, 1966) 242-244. Cf. J. H. Neyrey, “Acts 17, Epicureans and Theodicy,” 124.n.22.

13. *Kyriai doxai*: Diogenes Laertius, 10.1.

14. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 426.n.18: “riddled with idols.”

15. *De natura deorum*, 1. 46-49.

うことは、悪いことなのであろうか。少なくとも彫像の美は理解されてしかるべきではないであろうか。キケロはエピクロス派に反対しストア派に賛同したが、ローマを荘厳な文明の都アテナイの後継者と見る眼は備えていた¹⁶。しかしルカの眼にそのアテナイは、「偶像が林立する森」(a luxuriant forest of idols)¹⁷と映ったのである。さて霊的覚醒の結果、パウロはどのような行動に出たのであろうか。

1.2 パウロの問答活動 (17:17-18)

17:17

διελέγετο μὲν οὖν ἐν τῇ συναγωγῇ τοῖς Ἰουδαίοις καὶ τοῖς σεβομένοις καὶ ἐν τῇ ἀγορᾷ κατὰ πᾶσαν ἡμέραν πρὸς τοὺς παρατυγχάνοντας.

その結果、彼は、ユダヤ教会堂ではユダヤ人たちや敬虔な人たち（ユダヤ教改宗者たち）と、アゴラでは毎日通りすがりの人たちに対して問答を行っていた。

「その結果」(μὲν οὖν)は、霊が覚醒した結果への言及であると解釈する。「問答を行っていた」(διελέγετο)という用語は、ソクラテスが行い続けた哲学的問答を想起させる。問答に関しては、先に17章12節でも、パウロはテッサロニカのユダヤ人会堂で「問答を行っていた」(διελέγετο)とある。新約聖書にδιαλέγομαιは13回出てくるが、そのうち10回は使徒言行録である¹⁸。プラトンの読者であるならば、ソクラテスの哲学的問答を想起せざるをえないであろう¹⁹。問答(διάλογος, dialogue)は、ソクラテスが常日頃「アゴラで」(ἐν τῇ ἀγορᾷ)行っていた営みである。アテナイ人であろうと在留外国人であろうと、これはという人をつかまえては自他を吟味するために問答を行った²⁰。ローマ時代においては、ストア派は哲学的問答に長けているがエピクロス派は劣っていた、というステレオタイプな通念が流通していた²¹。ルカはそれに便乗して、ストア派の観点からパウロをソクラテス的問答に長けた哲学者として描こうとしているように思われる。ルカの意識では、問答を行うパ

16. Cicero, *Pro Flacco*, 62. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 570.

17. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 570.

18. 17:2, 17; 18:4, 19; 19:8, 9; 20:7, 9; 24:12, 25. Cf. M. D. Given, "The Unknown Paul," 348.

19. Plato, *Apologia*, 19D; 33A; *Republica*, 454A. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 424. n. 2. Cf. M. D. Given, "The Unknown Paul: Philosophers and Sophists in Acts 17," *Society of Biblical Literature 1996 Seminar Papers* (Atlanta: Scholars Press, 1996) 348: "For Luke, Paul is the first and foremost Christian dialectician."

20. Plato, *Apologia*, 13.

21. Diogenes Laertius, 7.47; 10.31; Cicero, *Academica*, 2.97; *De finibus*, 1.6, 22. Cf. M. D. Given, "The Unknown Paul," 349-350.

ウロは再来のソクラテスなのである。ただし、「会堂ではユダヤ人や神を敬う人々と」という文言を最初におく。ユダヤ人たちに対する自己弁護であろう。ちゃんとユダヤ教を優先しているのだということ、ルカは印象づけたいのである。「毎日 (κατὰ πᾶσαν ἡμέραν) は、安息日以外の週日をさすと思われる。ルカのパウロは、安息日には「ラビ」として、週日には「哲学者」として語ったというわけである。

以後、哲学者ソクラテスを連想させるパウロ像が繰り返して現れることになる。問題は、これをどう理解したらいいのかということである。ルカは、ソクラテスを率直に善いものとして受容し、その線に沿ってアテナイ人に布教するつもりなのか。それとも本当はソクラテスに賛同するつもりはないけれども、それが護教と布教のために有用であるかぎりにおいて、単に便宜的に利用するつもりなのであろうか。

17:18

τινὲς δὲ καὶ τῶν Ἐπικουρείων καὶ Στοικῶν φιλοσόφων συνέβαλλον αὐτῷ, καὶ τινες ἔλεγον, Τί ἂν θέλοι ὁ σπερμολόγος οὗτος λέγειν; οἱ δέ, Ξένων δαιμονίων δοκεῖ καταγγελεὺς εἶναι ὅτι τὸν Ἰησοῦν καὶ τὴν ἀνάστασιν εὐηγγελίζετο.

(しかるに) エピクロス派・ストア派哲学者たちの幾人かも、彼との対話に応じはじめた。そこで一方の人たちは「この知ったかぶりめは何を言いたいのであろうか」と言い、他方の人たちは「この人は外国の神々 (ダイモニア) の布告者であるらしい」と言い始めた。彼がイエスとその魅りを福音として布告していたからである。

「エピクロス派・ストア派哲学者の幾人」(τινὲς δὲ καὶ τῶν Ἐπικουρείων καὶ Στοικῶν φιλοσόφων)：これらの学派への言及は、新約聖書では hapaxlegomenon である。単に叙述に彩を添えるためだけの言及なのか。そうでなければ、この言及は文脈上どのような意義をもつのか。そもそもルカはこれらの学派についてどれくらいの知識をもっていたのであろうか。

エピクロス派への言及に関して言えば、それは時代錯誤でないことは確かである。ディオゲネス・ラエルティオスによると、エピクロス共同体は紀元2世紀後半から3世紀に入っても存続していた。ディオゲネスは、アテナイにおけるエピクロス学園の学頭の名前を紀元1世紀に至るまで列挙している²²。ヌメニオスの断片も、少なくともこの時期までアテナイにエピクロスの学園が存続していたことを証左する²³。ハドリアヌス帝時代 (後117-138) の

22. Diogenes Laertius, 10.9-10. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism* (Cambridge University Press, 2009) 48.

碑文によると、「ディアドキイ」(Diadochi)あるいは「ペレグリヌス」(Perigrinus)として知られる人たちの存在が確認される。彼らがエピクロス学園の学頭の後継者かどうかは不明であるが、「エピクロスの」学派に属する人たちであることは確かである。トラヤヌス帝の死後、その寡婦プロティナ(Plotina)はハドリアヌス帝から、エピクロス共同体は自分自身の指導者を選んでよいし、在留外国人を候補者として考慮してもよいという許可を得ている²⁴。マルクス・アウレリウス帝(在位:後161-180)は、アテナイにエピクロス哲学の教授職を設けることを定めた²⁵。紀元後最初の200年間において、エピクロスの教説が都市のエリートたちを魅了したことは、プルタルコス著作からも知ることができる²⁶。彼は概してエピクロスの教説に反対の立場をとるが、エピクロスの人物とその哲学を区別する見識は備えており、エピクロスその人に対しては少なからぬ敬意を払った²⁷。セネカはストア派でありながら、エピクロス哲学に造詣が深く、同意できる点に関しては率直に同意できる姿勢をもちあわせていた。エピクロスからの引用数に関しては、すべての哲学者のなかでルクレティウスに次いで多いことが知られている²⁸。エピクロス派は紀元2世紀においても今なお勢力を保っていた。その事実は、正統派エピクロス主義者オイノアンダのディオゲネス(Diogenes of Oinoanda)が、彼の町オイノアンダの公共広場に建立させたエピクロス碑文によって確認できる²⁹。

使徒言行録のテキストに戻る。エピクロス派とストア派は非常に異なる点が多いのにもかかわらず、ルカは「哲学者の輩」(τῶν... φιλοσόφων)と一括りにしている。両者の間には共通点もあると考えて、そう表現したわけではないであろう。両哲学派に対する知識不足であろうか。哲学者に対するステレオタイプな見方を露呈しているのか。そもそも「エピクロス派・ストア派」(τῶν Ἐπικουρείων καὶ Στοϊκῶν)という順序に意味があるのだろうか。歴史上は、エピクロス派よりもストア派のほうが古く、前3世紀初頭ゼノンに始まる。ルカはストア派よりもエピクロス派を買っているのだろうか。それはまずありえない。当時の

23. Numenius, *Fragmenta*, 24. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 48.

24. *Inscriptiones Graecae*, II.1097. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 48.

25. Philostratus, *Vitae sophistarum*, 2.2; Lucian, *Eunuchus*, 3; Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 48.

26. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 48-49.

27. Plutarch, *De fraterno amore*, 487D. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 51.

28. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 49.

29. Cf. J. Warren, ed., *The Cambridge Companion to Epicureanism*, 54-59.

アテナイではエピクロス派のほうが優勢であった可能性が高いが³⁰、それをルカは認識していたということであろうか。それとも叙述の行きがかり上、エピクロス派を最初に置く必要があったのか。

「(彼らは) 彼との対話に応じはじめた」(συνέβαλλον αὐτῷ) : 単なる会話ではなく、哲学的問答であろう³¹。ソクラテスの問答相手はしばしばソフィストであった。ルカは、パウロとの対話に応じ始めた哲学者たちをソフィストと重ね合わせているのかもしれない。ここで対話相手の反応が是か非の二つに分かれるが、これはルカが好むパターンである³²。彼が、エピクロス派を無神論者と見なすステレオタイプな見方に従っていると仮定するなら、前者はエピクロス派であり、ストア派を宗教性に富む人たちであると見なすステレオタイプな見方に従っていると仮定するなら、後者はストア派ということになるであろう。

「この知ったかぶりめは何を言いたいのであろうか」(Τί ἄν θέλοι ὁ σπερμολόγος οὗτος λέγειν;) : 使徒言行録の執筆時点での [ルカ—読者] のレベルで言えば、生かじりの知識をもつ読者ならば、この侮蔑語はエピクロス派哲学者によって語られたと思ったことであろう。この否定的反応を引き起こした理由は、パウロが語った「(イエスの) 甦り」(τὴν ἀνάστασιν) であると説明されている。エピクロス派の考えによると、死は存在の消滅である³³。おそらくその程度の知識はもっていたルカにしてみれば、人間の甦りという教説に対してエピクロス派哲学者たちは否定的な反応をしなければならない。「知ったかぶり」(σπερμολόγος) は、アゴラに落ちている種や食べくずをあさる鳥の意味から転じて、浅薄な哲学的知識をひけらかす、哲学専門家でない部外者といった侮蔑を意味するであろう³⁴。使徒言行録執筆の当時、キリスト教の布告者は文化人からそのように見られていたと思われるが、そのような見方はルカにとっては心外であったのではないかと思われる。「この(知ったかぶり)め」(οὗτος)

30. Cf. D. L. Balch, “The Areopagus Speech,” 74.

31. Cf. M. D. Given, “The Unknown Paul,” 343.

32. Cf. J. H. Neyrey, “Acts 17, Epicureans and Theodicy: A Study in Stereotypes,” 127. ルカ文書を通して、イエス、ペトロ、パウロの聴衆が、聞いたことをめぐって「分かれる」というパターンが繰り返して出てくる。それは使徒言行録17章全体にもあてはまる。テッサロニカでのパウロの演説:成功(17:2-4)—失敗(17:5-8)、ベレアでのパウロの演説:成功(17:10-12)—失敗(17:13-14)。23章6-10節におけるファリサイ派とサドカイ派の対照も参照。Cf. J. H. Neyrey, 128.

33. *Epistula ad Herodotum*: Diogenes Laertius, 10.81; *Epistula ad Menoeceum*: Diogenes Laertius, 10.121-127; *Kyriai doxai*: Diogenes Laertius, 10.139; Lucretius, *De rerum natura*, 3.830ff., Cicero, *De finibus*, 2. 31. 101; Plutarch, *Non Posse*, 1103D, 1104E; Usener, *Epicurea*, 226-228. Cf. J. H. Neyrey, 125.n.23.

34. Louw & Nida, 27.19: “a pseudo- intellectual who insists on spouting off.” ; J. W. Jipp, “Paul’s Areopagus Speech,” 571.

も、文脈上侮蔑の意味を含むと思われる。ルカは、ソクラテスも同じような侮蔑にさらされたと言いつたのかもしれない。アリストパネス『雲』の中で描かれるソクラテス像は、アテナイ人の見るところ「いろいろわけのわからない、たわごとを語る」(πολλὴν φλυαρίαν φλυαροῦντα)人物である³⁵。ルカが描くこの第一グループは、パウロの話に聞く耳をもたない高慢な知識人たちである。

この悪玉エピクロス派哲学者たちが、ルカの描きたいエピクロス派像なのかもしれない。もしそうだとするならば、たとえそれがステレオタイプな見方に便乗したものであったとしても、エピクロスの観点からは、無理解とこじつけであるように見える。自己の無知と無理解を棚に上げ、相手を悪玉としてやり込める仕方は、それこそソクラテスが嫌ったことである。実際のところ、エピクロス自身も知識を鼻にかけ相手を見下すような人物ではなかった。

第二グループは第一グループとは異なり、パウロの話に一応耳を貸す。「この人は外国の神々(ダイモニア)の布告者であるらしい」(Ξένων δαιμονίων δοκεῖ καταγγελεὺς εἶναι) : [ルカ—読者]のレベルでは、生かじりの知識をもつ読者は、これを言ったのはストア派哲学者たちであると思ったことであろう。ルカとしては、エピクロス派哲学者たちよりもストア派哲学者たちのほうが、キリスト教の教説に耳を貸す素地があると言いたいところか。耳を貸すといっても、気軽に受容するわけにはいかない。ストア派哲学者たちは、パウロの話に興味を示したものの、パウロを外国の神々の「布告者」(καταγγελεὺς)³⁶として猜疑と警戒心をもって見たのである。ここにもパウロとソクラテスとの重複が見てとれる。ソクラテスも、「外国の新しい神々」(ἕτερα δὲ δαιμόνια καινά)を勝手に持ち込んだかどで、守旧派の市民たちから告発され処刑された³⁷。プラトンの観点からは、ソクラテスに対する非難・告発は不当であったのと同様に、ルカの観点からは、パウロに対する猜疑と警戒は不当であるということであろうか。哲学者たちが「外国の神々(ダイモニア)」(Ξένων δαιμονίων)というとき、「イエスと甦り」(τὸν Ἰησοῦν καὶ τὴν ἀνάστασιν)を指すと思われる。パウロはイエスとその甦りの教説を伝えたつもりなのに、ストア派哲学者たちはそれを「男神イエス(男性名詞)とその伴侶の女神アナスタシス(女性名詞)」と誤解した³⁸と、ルカは言いつたのかもしれない。

35. Aristophanes, *Nubes*, 19C4,

36. καταγγελεὺςは、アウグストゥスの時代、国家宗教の「布告者」(a herald)、あるいはアレオパゴスの布告者に用いられた。Cf. B. W. Winter, "On Introducing Gods to Athens: an Alternative Reading of Acts 17:18-20," *Tyndale Bulletin* 47.1 (May, 1996) 80.

37. *Euthyphron*, 1C; 2B; *Apologia*, 23B; Xenophon, *Memorabilia*, 1.1.1; Xenophon, *Apologia Socratis*, 10-11; Justin, *1 Apology*, 5.4; *2 Apology*, 10.5.

38. Dio Chrysostom, *Homilies on the Acts of the Apostles*, 38.1.

「福音として告知していた」(εὐηγγελίζετο) という言い方の背後に、せつかく善い話をしあげているという自負と、それにもかかわらず相手は理解しないという無知に対するいらだちが潜んでいるように思われる。

以上において [第一グループ=エピクロス派哲学者たち、第二グループ=ストア派哲学者たち] という仮定の下に話を進めてきたが、この仮定は正しいのであろうか。むしろ「エピクロス派・ストア派哲学者の輩」(καὶ τῶν Ἐπικουρείων καὶ Στωϊκῶν φιλοσόφων) という一括りに意図があると仮定するならば、ルカの焦点はグループの区分にはなく、哲学者たちのステレオタイプ化にあると考えることもできる。ルカは、ギリシア文化を担うアテナイの代表者という役柄で哲学者たちを登場させ、洗練されたキリスト教の代表者パウロと対話させることによって、キリスト教の卓越性を際立たせようとしているのである。ルカの関心は、エピクロス哲学にもストア哲学にもない。キリスト教の擁護が彼の目的である。その目的を達成するために、格好の引き立て役として哲学者の輩を選んだのであろう。パウロをソクラテスと重ね合わせることも同様の手法かと思われる。ルカはソクラテス哲学に関心はないけれども、パウロを引き立てるにあたりソクラテスが有用なので、ソクラテス的パウロ像を捻出しているのではないであろうか。もしこの解釈が正しいと仮定するならば、この節(17:18)でエピクロス派とストア派に言及しておきながら、さらにはパウロをソクラテスと二重写しにしていながら、この箇所においても使徒言行録の他の箇所においても、いっさい哲学の学説への言及がないという事実の説明がつく。ルカは、本当は哲学には関心がないのである。

1.3 パウロの「身柄確保」とアレオパゴスへの「連行」(17:19-21)

17:19

ἐπιλαβόμενοι τε αὐτοῦ ἐπὶ τὸν Ἄρειον Πάγον ἤγαγον, λέγοντες, Δυνάμεθα γνῶναι τίς ἡ καινὴ αὐτῆ ἢ ὑπὸ σοῦ λαλουμένη διδαχὴ;

そこで彼らは彼の身柄を確保した後、アレオパゴスに連行していった。言うことには、「あなたが説いているこの新しい教えが、いったい何であるかを、私たちには判定する権限があります」

先に述べた哲学者たちのグループ分けに従うなら、「そこで彼らは彼の身柄を確保した後」(ἐπιλαβόμενοι τε αὐτοῦ)³⁹の主語は、第二グループのストア派哲学者たちということになるであろう。とはいえエピクロス派哲学者たちは、この時点で退場したと考える必要はない。

39. 使徒言行録の他の箇所では、ἐπιλαμβάνωは正式の逮捕を意味する。Cf. 16:19; 17:6; 18:17; 21:30, 33; cf. 9:27; ルカ 23:26.

彼らにはまだ演じる役割が残っている。ともあれパウロが説くキリスト教の使信を嘲笑するエピクロス派哲学者たちとは対照的に、ストア派哲学者たちはパウロの話にまじめな関心を示す。その関心は新来の宗教に対する警戒となって現れる。この点でもパウロは、ポリスに有害な神々を導入したという嫌疑をかけられたソクラテスと重なる。ストア派哲学者たちが、「私たちには権限がある」(Δυνάμεθα) というとき、それは法的権限を意味し⁴⁰、「判定する」(γνώναι) も法廷の意味合いをもつ⁴¹と思われる。ところで、このγνώναιに始まり、文脈上「知る」(γνώ-) 語幹の用語が続く (vv. 19, 20, 23 (bis), 30)。知ることの強調は、プラトンの観点からは、「知」を愛し求めたソクラテスの生涯を連想させるが⁴²、愛智としての哲学はおそらくルカの関心事ではないであろう。

「アレオパゴス」(τὸν Ἄρειον Πάγον) の本来の意味は、「アレス神の丘」である。アテナイにおいて貴族制が実権を握っていた時代、アレオパゴスの議会は貴族勢力の牙城であった。しかしソクラテス裁判が行われたのは民主制の時代に入ってからであり、裁判の場所はアレオパゴスではなくアゴラの南西端にあったヘリアイアの法廷であった。ローマ時代のアテナイでは、アレオパゴスは法廷を開催する場所であり、宗教を始めとして文化や政治に関わる事柄を扱った可能性がある⁴³。ルカは、裁判のモチーフにおいてパウロをソクラテスと重ね合わせている。そこには叙述の中で進行中の出来事を、「キリスト教とヘレニズム哲学の間の模擬裁判」(a mock trial between Christianity and Hellenistic philosophy)⁴⁴として描きたい意図が見え隠れしている。しかしそれを察知するかどうかは、パウロの聴衆なりルカの読者に委ねられている。

アレオパゴスへの連行の理由は、「あなたが説いているこの新しい教えが何であるかを、私たちは判定する権限があります」(Δυνάμεθα γνώναι τίς ἡ καινὴ αὐτῆ ἢ ὑπὸ σοῦ λαλουμένη διδασχῆ) である。ギリシャ語テキストの疑問符は不要である。聴衆の側の好奇心を示すととる解釈もあるが⁴⁵、むしろ先述したように、新しい宗教に対する警戒を示すと解釈するのがよいと思われる。アテナイ人は外国の神々の受容に賛成することもあったが、反対するこ

40. *Oxyrhynchus Papyri*, 899.l. 31, l. 9. Cf. B. W. Winter, "On Introducing Gods to Athens: An Alternative Reading of Acts 17:18-20," *Tyndale Bulletin* 47.1 (May, 1996) 81.

41. Cf. B. W. Winter, "On Introducing Gods to Athens," 82.

42. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 425.

43. Cicero, *De natura deorum*, 2.74. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 573-574.

44. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 571 は、今回の出来事を "a kind of mock trial between early Christianity and the epicenter of pagan philosophy and culture" として描くことが、ルカの意図であると考えられる。

45. Cf. P. Gray, "Implied Audiences in the Areopagus Narrative," *Tyndale Bulletin* 55.2 (2004) 210-211.

ともしばしばあった⁴⁶。「権限がある」(δυνάμεθα)も、法的権限への言及であると仮定するならば、つじつまが合う⁴⁷。叙述のレベルでは、アレオパゴス議会はパウロが説く新来の宗教について法的な判断を下す権限をもっているとされているのである。

「この新しい教え」(ἡ καινὴ αὐτὴ διδαχὴ)：ルカは、キリスト教対ヘレニズム哲学という構図に基づき、聴衆の口からこの警戒とも侮蔑とも好奇心ともとれる言葉を語らせる。それによって、哲学者たちは知恵の探求者を標榜していながら、その実、すぐれた知恵であるキリスト教には無知であるのだと暗に批判しているように思われる。プラトンとエピクロスの観点からは、キリスト教の優位性の臭いがどうも鼻につく。

17:20

ξενίζοντα γὰρ τινα εἰσφέρεις εἰς τὰς ἀκοὰς ἡμῶν· βουλόμεθα οὖν γινῶναι τίνα θέλει ταῦτα εἶναι.

なぜなら、あなたは私たちの聴聞に何か外国風なものどもを持ち込んでいるからです。だから私たちはそれらが何であると布告したいのかを判定したいのです」

パウロを尋問する理由が、改めて言及される。「あなたは何か外国風なものどもを... 持ち込んでいる」(ξενίζοντα τινα ... εἰσφέρεις)。ソクラテスに対する訴状を想起させる文言であり、ルカはそれを意図しているものと思われる。「外国風なものども」(ξενίζοντα τινα)は、文脈上イエスと魅りを指す。ルカはこの表現によっても、キリスト教の真価に無知なヘレニズム哲学者を批判的に描こうとしている。パウロは新奇な神々を「持ち込んでいる」(εἰσφέρεις) 嫌疑をかけられているが、ソクラテスもポリスが認めない「外国の新しい神々」(ἕτερα δὲ δαιμόνια καινά) を導入したかどで告発された⁴⁸。ソクラテスの伝承においても、同じ動詞がソクラテス告発の理由を示すのに使われている⁴⁹。「私たちは、それらが何であると布告したいのかを判定したいのです」(βουλόμεθα οὖν γινῶναι τίνα θέλει ταῦτα εἶναι) 中の「布告したい」(θέλει) は、「意図する」・「意味する」ではなく「主張する」「布告する」と解釈するのがよいと思われる⁵⁰。他方、プラトンの観点からは、この文言を「私たちはそれらが何であるかを知りたいのです」と理解することが許されるならば、

46. Josephus, *Contra Apionem*, 2.262, 265, 266-268; Euripides, *Bacchae*, 256-259. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 572-573.

47. Cf. B. W. Winter, "On Introducing Gods to Athens," 81.

48. *Apologia*, 21C1, 26B5.

49. Xenophon, *Apologia Socratis*, 10-11; Justin, *1 Apology*, 5.4; *2 Apology*, 10.5.

50. Pausanias, *Periegeta*, 1.4.6; 4.33.1. Cf. B. W. Winter, "On Introducing Gods to Athens," 82.

愛智者としての哲学者の姿勢を示すととれなくもない。しかしそれはルカの意味ではないであろう。ルカの焦点は、哲学談義ではなくキリスト教の布告にある。

17:21

Ἀθηναῖοι δὲ πάντες καὶ οἱ ἐπιδημοῦντες ξένοι εἰς οὐδὲν ἕτερον ἠὲ κἀκαίρου ἢ λέγειν τι ἢ ἀκούειν τι καινότερον.

アテナイ人のだれもが、またそこにすむ外国人も、他でもなく何かもっと新しいことを話したり聞いたりすることに閑暇をささげていたのである。

「アテナイ人のだれもが」(Ἀθηναῖοι δὲ πάντες)：ルカは、哲学者たちをアテナイ人全体と混合するだけでなく在留外国人までも混合し、その混然とした全体をパウロの聴衆として造り上げる。「だれもが」(πάντες)は誇張であろう。ここにもルカのステレオタイプの傾向が露呈している。もしこのようなやり方がルカの常套手段であるならば、品性が疑われる。そのように聴衆を一般化するのは乱暴ではないであろうか。もっと個々人の違いに尊敬をとまではいわないにしても、各グループの特徴に注意を払うべきではないであろうか。もっともルカとしては、新奇な神々を導入しようとしているという嫌疑をかけられたパウロを擁護する必要があるのであろう。そこで、パウロに投げかけられた否定的な言葉をそのまま対話相手に投げ返すのである。ルカにしてみれば、新奇な宗教にうつつをぬかしているのは、野蛮との風評を受けているキリスト者たちではなく、洗練された文化の継承者として誉れが高いアテナイ人のほうなのである。

「閑暇をささげていた」(ἠὲ κἀκαίρου)：εὐκαιρέωの語義は「閑暇をささげる」⁵¹、「好ましい時、閑暇、機会をもつ」という意味であるが⁵²、ここでは批判と侮蔑が含意されていると思われる。ルカは哲学者たちの日々の営みをそのように見たのである。役に立たないたわごととうつつをぬかしている者たちというステレオタイプな見方である。哲学者への理解と尊敬が足りないと言ったところで、ルカには負け犬の遠吠えにしか聞こえないのかもしれない。

「何かもっと新しいこと」(τι καινότερον)も、使徒言行録執筆時の[ルカ—読者]のレベルでは、新しもの好きという揶揄を含意しているものと思われる。アテナイ人の新しもの好きは、名高い伝説であった⁵³。キケロやプルタルコスは、過度の好奇心を不道徳として戒めた⁵⁴。アプレイウスやプルタルコスは、好奇心はともすれば迷信に結びつく指摘してい

51. *LSJ*, 717.

52. *BAG*, 321.

53. Thucydides, *Historiae*, 3.38.5. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 575.

る⁵⁵。これらはストア派の見方であるが、さまざまな迷信的習慣に対してはエピクロスも断固反対する姿勢をとった⁵⁶。ルカとしてはストア派に便乗したつもりであろうが、それとは知らずにエピクロス派にも便乗して、アテナイ人の新しもの好きを揶揄しているわけである。他方、叙述における「パウロ—聴衆」のレベルでは、哲学者たちの旺盛な探究心への言及ととれないこともないが、その場合はパウロの本心ではなく社交辞令にすぎないであろう。さらにルカが構想する疑似裁判の文脈から考えると、迷信・邪教への言及ともとれる。アテナイ人たちが外来の宗教に警戒心をもっていたことを考えると、その可能性も否定できない。ルカとしては、パウロが布告する宗教を新奇のものであると批判するアテナイの文化人たちに対して、その批判は新しい宗教好きで迷信家の彼らにこそあてはまると言いたいのかもされない⁵⁷。

2 演説 (17:22-31)

2.1 序論 (17:22-23)

17:22

Σταθείς δὲ [ὁ] Παῦλος ἐν μέσῳ τοῦ Ἀρείου Πάγου ἔφη, ἄνδρες Ἀθηναῖοι, κατὰ πάντα ὡς δεισιδαιμονεστέρους ὑμᾶς θεωρῶ·

そこでパウロはアレオパゴスの真ん中に立って、言った。「アテナイ人の皆さま、あなたがたはあらゆる点で非常に信心深い人たちであると、私は観察しております。

ここからパウロの演説が開始する。「アレオパゴスの真ん中に立って」(Σταθείς δὲ [ὁ] Παῦλος ἐν μέσῳ τοῦ Ἀρείου Πάγου) は、単に場所的にアレオパゴスの丘の上に立ったということではなく、アレオパゴス議会のメンバーたちの真ん中に立ったということであろう。33節の「かくして、パウロは彼らの中から出て行った」もこの解釈と呼応する。パウロの演説は、「アテナイ人の皆さん」(ἄνδρες Ἀθηναῖοι) という呼びかけで始まる。プラトン『ソクラテスの弁明』も、ソクラテスによる陪審員たちへの同じ呼びかけで始まる⁵⁸。パウロとソクラテスの重ね合わせは、依然として継続している。今からパウロはソクラテスさながら、

54. Cicero, *De officiis*, 1.19; Plutarch, *De curiositate*, 513D-518B. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 575.

55. Apuleius, *Metamorphoses*, 11; Plutarch, *De superstitione* は、全体にわたりこの点を指摘している。Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 575.

56. Lucretius, *De rerum natura*, 1.55-56.

57. Cf. D. L. Balch, "The Areopagus Speech," 74.

58. Plato, *Apologia*, 17A.

ポリス宗教に癒着するアテナイ人に向かって、彼が固守する正しい宗教について演説を行うのである。以下に続くキリスト教を布告する演説は、教養あるアテナイ人、特に第一グループのエピクロス派哲学者たちにとっては、あまり意味をなさないであろうことが予期できる。しかしパウロはおかまいなしに、キリスト教はギリシア文化にひけをとらないという気負いに基づいて、演説を進める⁵⁹。

その演説は、総じてストア派の立場に便乗する仕方で語られる⁶⁰。「あなたがたはあらゆる点で非常に信心深い人たちである」(κατὰ πάντα ὡς δεισιδαιμονεστέρους ὑμᾶς) は、批判のトゲを隠した社交辞令であり、ソクラテスのエイロネイア(εἰρωνεία)を想起させる。「ルカのエイロネイアの描写」(a description of Luke's irony)⁶¹とも言える。「非常に信心深い人たち」(δεισιδαιμονεστέρους) は、より詳しく訳すと「非常に神々(ダイモニア)を畏敬している人々」となるであろう⁶²。先にパウロは、ストア派哲学者たちから「外国の神々(ダイモニア)の布教者」という嫌疑をかけられた。そこで言及された「神々(ダイモニア) (δαίμωνιον) を逆手にとって、パウロは彼らに「あなたがたは... 非常に神々(ダイモニア)を畏敬している人々です」と言ったわけである。表面上は「非常に宗教熱心な人たち」「非常に敬虔な人たち」を意味する賛辞であるが⁶³、先に彫像だらけのポリスに対してパウロが否定的な気持ちを抱いたことを考えると、本心は賛成でも容認でもなく非難と拒絶であろう。δεισιδαίμωνという形容詞には、「迷信にとらわれている」という否定的な意味も確認されている。実際、紀元1世紀末にはこの意味のほうが優勢であった⁶⁴。この箇所も、[パウロ—対話相手]のレベルと[ルカ—読者]のレベルの両面から理解する必要がある。ルカは叙述においてパウロにお世辞を言わせているが、本当はそう思っておらず、アテナイ人の宗教に侮蔑の感情を抱いていたのである。哲学者たちに関していえば、当時のストア派には彫像や

59. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 430: “A Cultured Greek would dismiss these brief words as stylistically inadequate and muddled collection of clichés with an unexpected and improbable confusion, but it has power and vigor that would have eluded such critics, and, as an experiment in missionary theology, it continues to challenge Christian thinkers.”

60. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 430.

61. M. D. Given, “The Unknown Paul,” 350.

62. Cf. Plato, *Apologia*, 31D, 40A. ソクラテスに生じた「ダイモニア」(δαίμωνία)の体験が、彼の外なる「ダイモン神」(ὁ δαίμων)からの合図なのか、それとも彼の内なる良心の声なのかについては、議論の分かれるところである。ソクラテスに反対する者たちは、ソクラテスは新しいダイモン神のたぐいを祭っていると中傷した。*Apologia*, 24C, 26B.

63. 肯定的な意味については、cf. Xenophon, *Cyropaedia*, 3.3.58; Aristotle, *Politica*, 1315A; Aelian, *Varia Historia*, 5.17; Pausanias, 24.3. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 433; J. W. Jipp, “Paul’s Areopagus Speech,” 576; *Louw & Nida*, 53.3.

64. Diodorus Siculus, 32.12.

神殿を容認する傾向があったことが確認されている⁶⁵。言葉の面では彫像や神殿に反対して
いながら、行動の面ではそれらを甘く見逃していたストア派哲学者たちは、ルカには齒がゆ
く思われたことであろう。ましてはそれらを歓迎するようにルカには見えたエピクロス派哲
学者たちは、論外であったことであろう。しかしながらエピクロス派の名誉のためにいうと、
実はエピクロスほど彫像や神殿にまつわる迷信的習慣を非難した人物はいないのである。こ
の事実をどれくらいルカは認識していたであろうか。ルカがアテナイ人の宗教を批判したと
き、実はその点では同志であるエピクロスに便乗してその批判をしたことになる。エピクロ
ス派は、自然の事物の研究は神々が世界を威圧するという迷信とそれに由来する恐怖を緩和
し、「心の平静」(ἀταραξία)をもたらすと教え⁶⁶、この教説は人口に膾炙していた。しか
しルカの関心はおそらくエピクロス派の教説にではなく、彼らのなまぬるい生活態度にあっ
たものと思われる。いかなる学派に身を置こうとも、彫像だらけのポリスの中でそれを無批
判に受容する人たちは、ルカにしてみれば言行不一致の批判を免れないのである⁶⁷。ところ
で「あらゆる点で」(κατὰ πάντα)とは、具体的に何を指すのであろうか。

17:23

διερχόμενος γὰρ καὶ ἀναθεωρῶν τὰ σεβάσματα ὑμῶν εὖρον καὶ βωμὸν ἐν ᾧ
ἐπεγέγραπτο, Ἄγνωστω θεῷ, ὃ οὖν ἀγνοοῦντες εὐσεβεῖτε, τοῦτο ἐγὼ καταγγέλλω ὑμῖν.
なぜなら、私が(ポリスを)歩き回りながら皆さまの神聖な事物の数々を吟味していま
すと、「未知の神に」という碑文が書かれてある一つの祭壇も発見したからです。です
からこの私が今、皆さまが知らずに崇拜しているもの、それを布告しましょう。

パウロが「あらゆる点で」と指摘した内容がここで示される。まず「(私が)吟味していま
すと」(ἀναθεωρῶν)という分詞だが、ἀναθεωρέωの「一つ一つ観察する」、「繰り返して
観察する」、「注意深く観察する」、「深く吟味する」⁶⁸という意味あいを見ると、ここでもル
カはパウロをソクラテスばりの吟味を行う哲学者として描いているように思われる。「皆さ
まの神聖な事物の数々」(τὰ σεβάσματα ὑμῶν)、これが先ず第一にパウロが吟味したもの
である。σεβασμαは、本来「宗教活動に関連するもの」「敬虔な事物」という意味である⁶⁹。

65. Cf. D. L. Balch, "The Areopagus Speech," 74.

66. Lucretius, *De rerum natura*, 5.1194-1203.

67. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 577. エピクロス派の国家宗教への妥協的姿勢に
対する批判については、cf. Diogenes Laertius, 10.120; Cicero, *De natura deorum*, 1.85.

68. BAG, 54; Louw & Nida, 24.47: "for as I walked around and saw your objects of worship
and thought about them."

聖所にかぎらず、聖所の内外にある神々の彫像、祭壇、その他宗教に関連するすべてのものを含みうると考えられる⁷⁰。ルカは本心では「偶像」と言いたいところであろうが、そこはぐっとこらえ、「神聖な事物」という洗練された用語を選ぶ。場所柄を考えパウロを下手に出させているわけだが、ストア派のエピクテトスやクレアンテスが神殿、祭壇、彫像を無意味だとして批判したように⁷¹、それらを批判したいのが本音であろう。

次に、というより特にパウロが吟味の対象としたものは、「未知の神に」という碑文が書かれてある一つの祭壇 (βομὸν ἐν ᾧ ἐπεγέγραπτο, ἄγνωστω θεῷ) である。「未知の神に」(ἄγνωστω θεῷ) という単数形はルカによる変更の可能性もある。文献上の証拠は複数形のみである⁷²。祈りの際、呼びかけからもれるかもしれない神への恐れから、「未知の神々に」という祭壇は築かれたようである。多くの神々を大事にするアテナイ人の神観が背後にある。叙述における [パウロ—対話相手] のレベルでは、多神崇拜への批判は明言されておらず、いちおう紳士的対話の姿勢が維持されているが、使徒言行録における [ルカ—読者] のレベルでは、多神崇拜とそれにまつわる迷信的行為に対する批判が含意されていると思われる。ルカは多神崇拜のあり方に対して同調も理解も示さず、自分が固守する一神教の方向に話をもっていく⁷³。「未知の」(ἄγνωστω) は、単なるアテナイ人たちの知識不足を示唆するのか。それとも彼らの恥ずべき無知を告発しているのか⁷⁴。[パウロ—対話相手] のレベルでは前者であり、[ルカ—読者] のレベルでは後者であろうと思われる。このような二重の意味を示唆する用法は、17章を通じて繰り返し現れる⁷⁵。この用語に続いて、パウロは「あなたたちが知らずに」(ἀγνοοῦντες) という、無知を示唆する用語を投げかける。さらに30節でも、「無知の時代」(τοὺς χρόνους τῆς ἀγνοίας) という語句によって、無知を指摘する。このような無知の強調は、無知が迷信を生むと考えたプルタルコスやキケロの見解に連なる見方であると言えよう⁷⁶。[パウロ—対話相手] のレベルでは、これら一連の語句が含む辛

69. *LSJ*, 1587.

70. *BAG*, 753; *Louw & Nida*, 53.54, 55.

71. Cleanthes, *Hymn to Zeus (Stoicorum Veretum Fragmenta*, 1.537) ; Epictetus, *Diatribes*, 2.8.

72. Jerome, *Commentarius in Titum*, 1:12: 'to the gods of Asia, Europe, and Africa, to the unknown and foreign gods'; Pausanias, *Description of Greece*, 1.1.4, 5.14.8; Diogenes Laertius, 1.110. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 578.

73. Cf. Justin, *2 Apology*, 10.4-6.

74. Dio Chrysostom, *Orations*, 12. 29, 36-37 は、間違った神崇拜は不道徳につながると語り、特にエピクロス派に見られる女神崇拜を弾劾する。

75. Cf. M. D. Given, "The Unknown Paul," 343-344.

76. Plutarch, *De superstitione*, 164EF; Cicero, *De natura deorum*, 1.117; Diogenes Laertius, 2.91-92. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 578.

辣さに対話相手が気づいたかどうかは曖昧にされているが、[ルカ―読者]のレベルでは、感受性が鋭い読者ならばルカの意図を察知したのであろう。

ところで無知は、ソクラテスの哲学人生におけるキーワードである。「吟味のない生は生きるに値しない」という考えに基づき⁷⁷、ソクラテスの哲学は無知の自覚に始まり、無知の自覚に終わったと言えよう。ただし他者を無知呼ばわりしたり、他者の無知を暴露することは、ソクラテスの本意ではなかった。ソクラテスの意図は、自分も対話相手も共に無知を自覚し、その上で共に知恵を愛し求め続けることであつた。他方、ルカが描くソクラテス的パウロもしくはパウロ的ソクラテスとはいえば、他者の無知を暴露し、容赦なき攻撃を加える弁論家のように見える。その関心は、哲学的対話ではなくもっぱら教条のプロパガンダである⁷⁸。これがルカの描写だとするならば、かなり粗雑なソクラテス像であると言わざるをえない。同様な特徴が、「この私があなたがたに布告しましょう」(ἐγὼ καταγγέλλω ὑμῖν) という尊大な表現にも表れている。「布告する」(καταγγέλλω) は18節の「布告者」(καταγγελεὺς) に呼応しており、30節の「(神は) 命じている」(παραγγέλλει)、「回心するように」(ματανοεῖν) という上から目線の言葉にも連結する。哲学者の装いをしたパウロの背後に、プロパガンダ布告者の実像が透けて見える。

2.2 本論 (17:24-29)

2.2.1 造物主としての神 (17:24-25)

17:24

ὁ θεὸς ὁ ποιήσας τὸν κόσμον καὶ πάντα τὰ ἐν αὐτῷ, οὗτος οὐρανοῦ καὶ γῆς ὑπάρχων κύριος οὐκ ἐν χειροποιήτοις ναοῖς κατοικεῖ

(すなわち) 世界とそこにある万物を造った神、この者は天と地の主人ですから、人造の神殿に住まうことをしません。

「世界とそこにある万物を造った神」(ὁ θεὸς ὁ ποιήσας τὸν κόσμον καὶ πάντα τὰ ἐν αὐτῷ)：ルカはパウロの対話相手を多神崇拝者に仕立てた上で、「神」(ὁ θεός) は単一神であることを強調する。しかしルカは、プラトンによるとソクラテスは哲学的に重要な事柄を語る局面では、しばしば単数形の神を使用したことを⁷⁹知らなかったのであろうか。もし知らなかったとしたら、ルカは自分の味方をそれとは知らずに攻撃したことになる。もし知っていたとしたら、その多神崇拝者としてのアテナイ人像は故意的な一般化ということになる

77. Plato, *Apologia*, 38A.

78. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 578.

であろう。しかしこの箇所だけからでは、ルカがどれくらいプラトンの神観を知っていたかは判断できない。なお造物主としての神という概念は、エピクロス派にはそぐわない。エピクロスによると、神々は万有（宇宙）を創造する欲求・能力をもたないし、ましてや万有は神の統治のもとにはない。エピクロスがそのような考える根拠は、万有には不完全性があるという現実である⁸⁰。

ルカは「天と地」というヘブライ的用語ではなく、「宇宙」（τὸν κόσμον）というギリシア的用語を使用する。叙述における聴衆や使徒言行録の読者のヘレニズムの世界観を意識しているのこともかもしれない。「その方は天と地の主人です」（οὗτος οὐρανοῦ καὶ γῆς ὑπάρχων κύριος）は、ヘブライズムにかぎらずストア主義にもみられる考えである⁸¹。神は世界統治者であり、人間を含む万物のために配慮を行っていると言いたいのであろう。この文言は、ストア派哲学者たちにとっては耳障りがよかつたであろうが、エピクロス派哲学者たちにとってはそうでなかつたはずである。むしろ演説を聞く気がそがれる思いをしたであろう。エピクロスの神は、世界のことにも人間のことにも関与しない神であり、だれにも何にも煩わされることなく至福の場所で至福の生を楽しんでいる完全に自足した神である⁸²。人間のために「世界」（τὸν κόσμον）を造り、その世話をするというような面倒なことを神はしない⁸³。神慮の否定が、エピクロス派の基本的立場であつた。

「（神は）人造の神殿に住まうことをしません」（οὐκ ἐν χειροποιήτοις ναοῖς κατοικεῖ）：この神観はヘブライズムのものであるのみならず⁸⁴、ギリシアにおいても古来、クセノパネス、ヘラクレイトス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスによって表明されてきたものであり、特に新しい教説ではない。ストア派の創始者ゼノンも、彫像や神殿に反対したと伝えられる⁸⁵。神殿に住まう神という考え方は擬人神観と結びついているが、[ルカ—読者]のレベルでは、生かじりの知識をもつ読者なら、エピクロスに帰せられる擬人的神観⁸⁶に対

79. Plato, *Apologia*, 22A, 28E, 30A, 33C. Cf. *Leges*, X903B-905E; *Timaeus*, 34A-B, 55D, 68E, 92C. ただし『法律』と『ティマイオス』では、話者はソクラテスではなく、それぞれアテナイからの客人やティマイオスである。

80. *De rerum natura*, V. 156-194.

81. Dio Chrysostom, *Orationes*, 12. 27, 33, 34.

82. *Epistula ad Herodotum*: Diogenes Lartius, 10.76; *Epistula ad Pythoclem*: Diogenes Lartius, 10.97; Cicero, *De natura deorum*, 1.45, 51-56.

83. Aetius, 1.7.7=H. Usener, *Epicurea*, 361.

84. LXX: Is 42:5; 2 Macc 7:22-23.

85. Plutarch, *De Stoicorum repugnantiis*, 1034B. Cf. D. L. Balch, "The Areopagus Speech An Appeal to the Stoic Historian Posidonius against Later Stoics and the Epicureans," in D. L. Balch, Everett Ferguson, Wayne A. Meeks, eds., *Greeks, Romans, And Christians Essays in Honor of Abraham J. Malherbe* (Minneapolis: Fortress Press, 1990) 67-68.

する批判を想起したかもしれない。後代のストア派の中には彫像を擁護する立場も見られるが⁸⁷、正統的ストア派の立場は彫像や神殿の拒否であると一般に考えられていた⁸⁸。ルカはこの一般的な理解に便乗して、暗にエピクロス派を批判しているつもりなのかもしれない。しかしながらエピクロス派も、神々は神殿に住まわないという考え方を熟知していた。実際、彼らは、彫像や神殿の崇拜は神々を矮小化する迷信的行為であるとして非難した。もつとも、ルカにとって問題なのは哲学の教説ではなく、文化人の自己矛盾ということであろう。彼らはギリシア文化の継承者であることを標榜していながら、野蛮な偶像崇拜を容認していた。そこがルカの批判点なのである。

17:25

οὐδὲ ὑπὸ χειρῶν ἀνθρωπίνων θεραπεύεται προσδεόμενός τινος, αὐτὸς διδοὺς πᾶσι ζῶην καὶ πνοὴν καὶ τὰ πάντα·

また何かを必要とする者として人手による世話を受けることはありません。彼こそすべての人々に命と息と万物を与え続けている者なのですから。

「また人手による世話を受けることはありません」(οὐδὲ ὑπὸ χειρῶν ἀνθρωπίνων θεραπεύεται προσδεόμενός τινος) は、神々への供犠の習慣に対する非難であろう。エピクロスもその弟子も、国家宗教の供犠や祭事に参加したということではしばしば批判されてきた⁸⁹。もつともルカがそれを意識してこの文言を語っているかどうかは疑わしい。前節に引き続き、ルカはストア派に便乗してパウロにこの発言をさせていると思われる⁹⁰。ただし、神は「何かを必要とする者」(προσδεόμενός τινος) ではないという考え(神の自足性)は、ストア派だけではなくエピクロス派の教説でもある。キュニコス派にも同様の考えが見られる。実際のところ、神の自足性という観念は、ソクラテス以前の哲学者たちの時代から新プラトン主義者の時代にまで及ぶ普遍的なものである⁹¹。「彼こそがすべての人間に命と息と万物を与え続けている者なのです」(αὐτὸς διδοὺς πᾶσι ζῶην καὶ πνοὴν καὶ τὰ πάντα) も、ストア派に

86. Cicero, *De natura deorum*, 1.18.46-49; 1.15.71; 1.27.75-77. Cf. D. L. Balch, 68.

87. Cf. Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.

88. Cf. D. L. Balch, 71. Cf. J. M. Rist, *Epicurus An Introduction* (Cambridge University Press, 1972) 156-157.

89. Philodemus, *De pietate*, 2, col.

90. Seneca, *Epistulae morales ad Lucilius*, 95.47-50; 41.1. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 580.

91. ストア・キュニコス派の Heraclitus, *Epistulae*, 4. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 434. n. 93; Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 580.

見られる考えである⁹²。「命」(ζωήν) という用語には、ストア的ニュアンスが込められているかもしれない。オルベウス教のゼウス賛歌では、ゼウス (Ζεύς) は「あらゆる被造物の息」と表現されている。ルカとしては、ゼウスではなくパウロの神こそが「生ける者」(ζών) であり、あらゆる人間の「息」(πνοήν) であると言いたいのもかもしれない。もしそうなら、ルカはストア派のまわしで相撲をとっていることになる。

2.2.2 神慮 (17:26-27)

さらに神慮のモチーフが続く。

17:26

ἐποίησέν τε ἐξ ἑνὸς πάν ἔθνος ἀνθρώπων κατοικεῖν ἐπὶ παντὸς προσώπου τῆς γῆς, ὀρίσας προστεταγμένους καιροὺς καὶ τὰς ὁροθεσίας τῆς κατοικίας αὐτῶν,

また神は一人から人間たちの種族全体を作り出し、全地上に住むようにさせました。まず秩序ある時と彼らの居住地の境界を区分したうえでです。

「また神は一人から人間たちの種族全体を作り出した」(ἐποίησέν τε ἐξ ἑνὸς πάν ἔθνος ἀνθρώπων) は、ヘブライズムの伝統にもヘレニズムの伝統⁹³にも見られる考え方である。この考え方はストア派にも見られる⁹⁴。ἐνὸς を「一人」(男性名詞)ではなく「一」(中性名詞)と読むことも可能である。その場合、世界は一つであり統一した全体であるという、正統的ストア派の教説を反映しているという解釈も成り立つ⁹⁵。その場合、あらゆる民族の平等を示す見方ととれないこともないが、ルカの意図は、全人類をルカが想念するキリスト教の神の統括の下に置くことにあるものと思われる。ルカは神の配慮を強調したいのであろうが、エピクロスの見点からは異論がある。神慮の観念はどこまで一貫性を維持できるであろうかということである。神慮をあまり強調しすぎると、運命論と区別がつかなくなるのではないであろうか。

しかるに運命論こそはエピクロスが拒否した考え方である⁹⁶。その拒否の背後には、神々

92. Cf. Marcus Aurelius, *Meditations*, 4. 23: ἐκ σου πάντα, ἐν σοι πάντα, εἰς σὲ πάντα Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 435.n.98.

93. Cf. Homer, *Ilias*, 1.544: “father of gods and mortals”; Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.29: “a progenitive or ancestral god (προπάτωρ θεός),” 12.43, 36.56. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 436.n.105.

94. Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.30, 42.

95. Diogenes Laertius, 7.140, 143, 151; Sextus Empiricus, 9.60, 75, 78–80, 111, 120, 132; Cicero, *De legibus*, 22–39; *De officiis*, 3.28. Cf. D. L. Balch, “The Areopagus Speech,” 57, 77; J. W. Jipp, “Paul’s Areopagus Speech,” 582.

は人間の世界に関与しないという神観があるとともに、人間の自由意志を保全しなければならないという意図がある。エピクロスは、神慮の強調は決定論・運命論につながり、その結果、人間の自由意志が疎外されることを危惧した。キケロによると、エピクロスは「原子の逸れ」によって運命の必然を避けることができると考え、運命論を価値なきものとして斥けた⁹⁷。賢者は運命に屈従することなく、むしろ「運命には敢然と立ち向かう」⁹⁸。神慮は強調されすぎると運命論に変容し、世界の現実や人間の自由意志と齟齬をきたすことになる。

「秩序ある時と彼らの居住地の境界を区分しました」(ὀρίσας προστεταγμένους καιρούς καὶ τὰς ὀροθεσίας τῆς κατοικίας αὐτῶν)は、解釈の難しい一文である。「秩序ある時(複数)」(προστεταγμένους καιρούς)は、ヘレニズム哲学の観点から神慮が司る四季への言及ともとれるし、ヘブライズムの観点から歴史上の諸時代への言及ともとれる。「彼らの居住地の境界(複数)」(τὰς ὀροθεσίας τῆς κατοικίας αὐτῶν)も、ヘレニズム哲学の観点から神慮が司る気候上の地帯区分への言及ともとれるし、ヘブライズムの観点から政治的国境への言及ともとれる⁹⁹。もし神慮が司る自然現象への言及であると仮定するならば、神慮を否定するエピクロス派への批判となり、エピクロス派哲学者たちとしては受け入れがたいものとなる¹⁰⁰。しかしどちらの意味であるかは判然としない。むしろルカは、ここでも意図的に二重の意味の手法を用いている可能性がある。ヘレニズム哲学の神慮の教説もヘブライ人宗教の神慮の教説も両者共に、キリスト教の優秀性を弁証すると言いたいかのように思われる¹⁰¹。

17:27

ζητεῖν τὸν θεὸν εἰ ἄρα γε ψηλαφήσειαν αὐτὸν καὶ εὗροιεν, καί γε οὐ μακρὰν ἀπὸ ἐνὸς ἐκάστου ἡμῶν ὑπάρχοντα.

それは彼らが神を求めるためです。もしかして彼らが神に触るならば、神を発見することもできるでしょう。実際、神は私たち一人一人から遠く離れてはいません。

「彼らが神を求めるために」(ζητεῖν τὸν θεὸν)：宗教多元論の観点からは、アテナイ人は彼ら自身の神々を信奉しているが、そうする権利があり、他者が干渉すべき問題ではない。だがルカは干渉する。この文言を語るパウロは、キリスト教の絶対性・排他性の臭いを漂わ

96. Lucretius, *De rerum natura*, 2.251-293; Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.37.

97. Cicero, *De fato*, 22; *De natura deorum*, 1.55.

98. *Epistula as Pythoclem*: Diogenes Laertius, 10.120a.

99. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 436.n.107.

100. *Epistula ad Herodotum*: Diogenes Laertius, 10.76-77.

101. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 582.

せている。このパウロ像は、独断を嫌ったソクラテスには似つかわしくない。ソクラテス的パウロ像はどこに去ってしまったのか。

「もしかして彼らが神に触れるならば、神を発見することもできるでしょう」(εἰ ἄρα γε ψηλαφήσειαν αὐτὸν καὶ εὗροιν) : 「もしかして」(ἄρα) は、ある程度の不確かさを意味するものと思われる¹⁰²。「触る」(ψηλαφήσειαν) は「手探りする」¹⁰³とも「触る」¹⁰⁴とも解釈することができる。前者はLXXの見方を、後者はストア派の見方を反映する¹⁰⁵。ここでもルカは二重の意味を意図している可能性がある。不確かさを臭わせる ἄρα とともに、二つの希求法(ψηλαφήσειαν, εὗροιν) が気になる。ニュアンスとしては、可能性はあるが蓋然性は高くないというようなもったいぶった感じがする。アテナイ人をパウロの神に到達していないと決めつけ¹⁰⁶、彼らにその神を求めることを勧めていながらも、神に至る道は必ずしもやさしくないともいふかのような口ぶりである。

「実際、神は私たち一人一人から遠く離れてはいません」(καὶ γε οὐ μακρὰν ἀπὸ ἐνὸς ἐκάστου ἡμῶν ὑπάρχοντα) : LXX¹⁰⁷にもストア派¹⁰⁸にも見られる教説であるが、ルカは相変わらずストア派の神観に便乗している感じがする。「私たち一人一人」(ἐνὸς ἐκάστου ἡμῶν) も、人間に対する個人的で親密な神慮を示唆するかのような表現である。うまい話ではあるが、エピクロス派の観点からは、現実はそうなっているかという疑問が呈される。そうなっていないから人々は悩み苦しむのである。「私たち」(ἡμῶν) と一緒くたにされては困る者もいるのである。エピクロスは、神々は人間界から遠く離れたところに住み、人間には関与せず恩恵も施さないと考えた¹⁰⁹。そう考えたほうがいたずらに悩まずに済むという見方にも、一理があると言えるかもしれない。

102. Louw & Nida, 71.19.

103. LXXではこの意味が多い。創世記 27:21-22; 申命記 28:29; 士師記 16:20; ヨブ記 5:14; イザヤ書 59:10. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 582.

104. Cf. Luke 24:39; Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.50: "people have a longinit to touch (ἀπτομένους) them (gods)." Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 436.n.115.

105. Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.60-61: 「すべての人間は... 確信をもって神に近づき、触れ(ἀπτομένους)」 Cf. D. L. Balch, "The Areopagus Speech," 77.

106. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 582.

107. イザヤ書 55:6.

108. Cf. Seneca, *Epistulae morales ad Lucilius*, 41.1-2; Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.27-30. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 583.

109. Seneca, *De beneficiis*, 4.4.1; H. Usener, *Epicurea* (Kessinger Legacy Reprint, 1887) 364.

2.2.3 神と人類の同族性 (17:28-29)

17:28

Ἐν αὐτῷ γὰρ ζῶμεν καὶ κινούμεθα καὶ ἐσμέν, ὡς καὶ τινες τῶν καθ' ὑμᾶς ποιητῶν εἰρήκασιν,

Τοῦ γὰρ καὶ γένος ἐσμέν.

なぜなら私たちは神の中に生き、動き、存在しています。それは皆さんのところの詩人たちの中のある人たちも語っているとおりです。

なぜなら私たちは神の一族でもあるからです。

ギリシア詩人からの引用であると思われる。それによってルカは、キリスト教徒はギリシア人から蔑まれる「異国人」(バルバロイ)などではなく、ギリシア人に劣らぬ文明人であることを示したいのだと思われる。

「私たちは神の中に生き、動き、存在しています」(Ἐν αὐτῷ γὰρ ζῶμεν καὶ κινούμεθα καὶ ἐσμέν) にぴったり合致するギリシャ語のテキストはないが、そのような考え方は、ストア派もしくはプラトンの宇宙論と適合すると言える¹¹⁰。この文言は、前6世紀の宗教家エピメニデスの『クレティカ』というゼウス賛歌の一節に似ている。エピメニデスは、いわゆる7賢人の一人で、アテナイの町にペストが流行したとき、アレオパゴスに黒い羊と白い羊を連れて行き、町を浄めたと言い伝えられる。エピメニデスからの引用かどうかは措くとしても、ストア派になじむ文言ではある。かくしてルカのストア派への偏向は、詩の引用からも確認できる。ちなみにζῶμεν「私たちは生きています」は、Ζεὺςとの掛け言葉の可能性もある。とはいエルカの独創ではなく、そういう趣旨の文献からの間接的引用であろうと思われる¹¹¹。

「皆さんのところの詩人たちの中のある人たち」(τινες τῶν καθ' ὑμᾶς ποιητῶν) は、アテナイの詩人たちを指す。「なぜなら私たちは神の一族でもあるからです」(Τοῦ γὰρ καὶ γένος ἐσμέν) は、前3世紀のストア派哲学者クレアンテスの『ゼウス賛歌』、または前4世紀初期のストア派詩人アラトウス(パウロと同じくギリキア出身)の詩からの引用の可能性も考えられる。二人とも、ストア派の創始者ゼノンから教えを受けた人物である。特に、アラトウスの『パイノメナ』(*Phaenomena*)という詩は、古代ギリシャ・ローマ世界で長い

110. Cf. Epictetus, *Enchiridion*, 1.14.6. Plato, *Timaeus*, 37C6-7. Dio Chrysostom, *Orationes*, 12.43: 「(ゼウス)… 命と存在の起源 (αἴτιον ζωῆς καὶ τοῦ εἶναι)」 Cf. J. W. Jipp, “Paul’s Areopagus Speech,” 583.

111. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 438; *The Letter of Aristeeas*, 16.

間流行したことが知られており、「私たちがまた神の一族だからです」という言葉も、その詩の一節と符合する¹¹²。ただしルカが直接にアラトゥスから引用したかどうかは、疑わしい¹¹³。ギリシア詩人の引用は、共感のゆえというよりむしろ方便のためであろう。ルカは、神慮の普遍性を主張するために、ストア派詩人の言葉が役に立つと考え、それを利用したのである¹¹⁴。叙述のこの段階においても、17章18節でパウロの対話相手として登場した哲学者たち (τινὲς δὲ καὶ τῶν Ἐπικουρείων καὶ Στοϊκῶν φιλοσόφων) が、依然としてパウロの視界に入っていると思われるが¹¹⁵、確認できるのはストア派哲学者だけのものである。エピクロス派哲学者はどこにいるのであろうか。

17:29

γένος οὖν ὑπάρχοντες τοῦ θεοῦ οὐκ ὀφείλομεν νομίζειν χρυσοῦ ἢ ἀργύρου ἢ λίθου, χαράγματι τέχνης καὶ ἐνθυμήσεως ἀνθρώπου, τὸ θεῖον εἶναι ὅμοιον.

したがって私たちは神の一族なのですから、金や銀や石（のようなもの）に、すなわち人間の技術と思案による彫像に、神性が類似しているなどとみなす義務はありません。

「神の一族」(γένος ... τοῦ θεοῦ) という文言は、人間は神の似姿に作られたという、古代イスラエル宗教にもプラトン『ティマイオス』にも見られる考え方を表す。ルカはこの考え方にに基づき、アテナイ人の偶像崇拜を非難するわけだが、エピクロス派もルカと同様の神観をもつことは既に述べたとおりであり、その非難はエピクロス派には当てはまらない。もつとも、ルカの非難が向けられる対象は、エピクロス派の教説ではなく、アテナイ人の偶像崇拜の行為であろう。

「神性」(τὸ θεῖον) は、「(多神教を背景にもつ) 神」(the Divinity) を意味するギリシア的な表現であり、神聖さに重点が置かれた用語である¹¹⁶。ストア派の神観になじむ用法である¹¹⁷。先述の「世界」(ὁ κόσμος) と同様に、この用語の選択にヘレニズムとの接点を求めるルカの姿勢が感じられるが、彼には迎合するつもりはないであろう。ルカがあえて ὁ θεός

112. Aratus, *Phaenomena*, v. 5 apud Eusebius, *Praeparatio Evangelica*, 13.12. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 439.

113. アレクサンドリアのユダヤ人哲学者Aristobulus of Paneasからの間接的引用の可能性もある。 Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 584.n.66.

114. Dio Chrysostom, *Orationes*, 30.26.

115. Cf. J. W. Jipp, "Paul's Areopagus Speech," 584.

116. *LSJ*, 788. Cf. Plato, *Phaedrus*, 242C; Herodotus, 1.32, 3.108; Thucydides, 5.70.

117. Epictetus, *The Golden Sayings of Epictetus*, 2, 20, 22.

といわないのは、それをキリスト教の神に取っておきたいためであろう。あるいは迷信くさい「神々」(δαίμόνια) と対比・区別するために、τὸ θεῖον を選んだのかもしれない。いずれにせよ、迷信に関しては、エピクロス派もストア派も言葉ではこれを厳しく批判したが、行動においては依然として神殿や神像を含む国家宗教に従事し、これと決別しなかった¹¹⁸。そこがルカのパウロが非難するところなのである。他方、ストア派哲学者やエピクロス派哲学者たちにしてみれば、また誤解を恐れずにあえていうなら、ソクラテスやプラトンにしてみても¹¹⁹、なぜポリス宗教の神々が断罪されなければならないのか、理解に苦しむのではないであろうか。

2.3 回心への勧め (17:30-31)

17:30

τοὺς μὲν οὖν χρόνους τῆς ἀγνοίας ὑπεριδὼν ὁ θεὸς τὰ νῦν παραγγέλλει τοῖς ἀνθρώποις πάντας πανταχοῦ μετανοεῖν,

たしかに神は無知の諸時代を見過ごしてきましたが、今や人間たちに、すべての場所のすべての人々が回心するよう命じています。

「無知の諸時代」(χρόνους τῆς ἀγνοίας) も尊大な物言いに思われる。もっとも「無知」(τῆς ἀγνοίας) は「誤解」も意味しうる。例によって二重の意味の用法であろう。叙述のなかの [パウロ—対話相手] としては、単に「誤解」という柔らかな意味であるかもしれないが、使徒言行録執筆時点での [ルカ—読者] としては「無知」という厳しい意味であろう¹²⁰。またしてもルカは、アテナイ人の無知を恥ずべきものとして非難しているのである。輝かしいギリシア文明の歴史を「無知の諸時代」と一括りにするあたりも、ルカの見方はステレオタイプであるだけでなく、高飛車である。パウロが説く宗教の導入によって、ようやく無知迷妄の世界に啓蒙の光が差し込んできたと言わんばかりである。アテナイ人からすると、ヘレニズム文化の価値を理解しないパウロこそ無知に見えるのではないであろうか。ソクラ

118. Cf. Plutarch, *De Stoicorum repugnantibus*, 1034B; Dio Chrysostom, *Orationes*, 12. 80-83.

119. プラトン『法律』において、プラトン自身の代弁者と思われる「アテナイからの客人」は、ギリシアの伝統的神々を全面的に受け入れたとは言いがたいが、それらを全面的に捨て去ったとも言えない。彼は、伝統的な神々の中にも、彼が論証によって到達した理論的な神々の性格を反映している諸面を読み取ることができた。したがって、彼は、伝統的な神々の性格を尊敬と崇拜に値するレベルにまで高めたと見るのが、妥当な解釈であると思われる。Leges, 803E, 803D; 715E-716A. Cf. G. R. Morrow, *Plato's Cretan City A Historical Interpretation of the Laws* (Princeton University Press, 1960) 400-401, 470.

120. Cf. M. D. Given, "The Unknown Paul," 344.

テスは無知と闘った哲学者であるが、ルカが描くソクラテス的パウロははからずも無知に屈した。いや、屈したというよりも、ソクラテスのメッキがはげたというほうが正しいかもしれない。パウロの本性はヘレニズムの哲学者ではなく、キリスト教の布告者である。そのパウロをソクラテス化しようとするところに、そもそも無理があったのではないであろうか。

「神は… 見逃してきました」(ὑπεριδὼν ὁ θεός) : 「見逃してきた」(ὑπεριδὼν) は「蔑視してきた」も意味する。これもルカの二重の意味の用法であろう。[パウロ—聴衆] のレベルでは「見逃してきた」の意味かもしれないが、[ルカ—読者] のレベルでは「蔑視してきた」の意味であろう¹²¹。これまでルカのパウロはソクラテス的問答者の仮面をかぶっていたが、今やその仮面を脱ぎ始め、宗教布告者の素顔を現した。それは、「神は今や人間たちに命じています」(ὁ θεός τὰ νῦν παραγγέλλει τοῖς ἀνθρώποις) という高踏的な言い方にも、「すべての場所のすべての人が回心するよう」(πάντας πανταχοῦ μετανοεῖν) という強制的な言い方にも現れている。先にパウロは、どんな人でも神を求めさえすれば、無条件で神に至ることができるかもしれないという寛容ともいえる言い方をしていたが、それは本心でなかった。やはり外せない条件があった。すなわち「回心する」(μετανοεῖν) ことである。ソクラテスに引きつけて表現するならば、「無知の自覚」¹²²ということになるであろうが、ルカの意味する回心の概念においては、ソクラテス的無知の自覚が占める場所はないと思われる。ともあれ人は回心しないかぎり、神に至ることはできない。これがルカの立場である。それにしてもなぜルカは回心にこだわるのか。

17:31

καθὼτι ἔστησεν ἡμέραν ἐν ἧ μέλλει κρίνειν τὴν οἰκουμένην ἐν δικαιοσύνῃ ἐν ἀνδρὶ ᾧ ὄρισεν, πίστιν παρασχὼν πᾶσιν ἀναστήσας αὐτὸν ἐκ νεκρῶν.

なぜなら神は、任命したある男性によって、正義をもって全世界をまさに裁こうとするある日を設定してあるからです。そのことの保証を、彼を死者たちのなかから甦らせたことによって、すべての人々に提示しています」

ルカが回心にこだわる理由は、神による審判という観念（弁神論）である。パウロは、「(神は)… 正義をもって全世界をまさに裁こうとする日を設定してある」(ἔστησεν ἡμέραν ἐν ἧ μέλλει κρίνειν τὴν οἰκουμένην ἐν δικαιοσύνῃ) という表現によって、神による世界審判という観念をアテナイ人の心に打ち込もうとする。その観念は、少なくともストア派哲学者

121. Cf. M. D. Given, "The Unknown Paul," 344.

122. Plato, *Apologia*, 21C-D, 22B-E, 23B-D, 29A-B,

たちにとっては、内容の違いは置くとして、聞き慣れた考えであり¹²³、それなりの重みがあったのではないかと思われる。これでルカは、パウロの形勢を逆転させたつもりなのかもしれない。パウロは、新奇な神々であるイエススとアナスタシスを導入したかどで、アテナイ人たちから裁判にかけられた。しかし今や、パウロは、エリンニユスの女神たち（復讐の女神たち）が君臨する裁判の場所アレオパゴスで、イエススこそが全世界の裁判者だと布告し、逆襲するのである。このパウロの姿は、『弁明』において裁かれるソクラテスが裁く者に逆転した姿と二重写しであると言えなくもないが、すでにルカのソクラテ斯的粉飾は崩壊している。

パウロもストア派も神による世界審判という考えを共有するが、パウロがストア派と違う点がある。それは「(神が) 任命したある男性によって」(ἐν ἀνδρὶ ᾧ ὤρισεν) という点である。その男性とは「イエスス」(ὁ Ἰησοῦς) を指す。神はイエスにおいて世界審判を行うという教説は、キリスト教徒にとってはなじみのものである。しかしストア派哲学者にとってはなじみではなく、唐突なものに思われたはずである。パウロはおかまいなしに「(神は) 彼を死者たちのなかから甦らせた」(ἀναστήσας αὐτὸν ἐκ νεκρῶν) と話を続け、甦りの教説を繰り返す。イエススの甦りなどと言われて、だれがパウロの話についていくことができたであろうか。ストア派には靈魂の不死の教説があるにはあるが¹²⁴、死者の復活となると別の次元の話になるであろう。プラトンの観点からは、イエスにおける世界審判の教説はあまりにも独断的であり、イエスの甦りの教説もあまりにも突飛であろう。エピクロスの観点からは、どちらの教説もとうてい受け入れがたいであろう。エピクロスの神は人間の世界に関与しない神である。死はすべての終わりである¹²⁵というのが、エピクロスの基

123. Cf. D. L. Balch, “The Areopagus Speech,” 79. ストア派における世界審判は、「万物の大燃焼」(ἐκπύρωσις, conflagratio) に関連して理解される。Cf. H. V. Arnold, *Roman Stoicism History of the Stoic Philosophy and its Development within the Roman Empire* (Humanities Press, 1911) 263.

124. Cicero, *Tusculanae Disputationes*, 11–12, 31–32.

125. *Epistula ad Herodotum*: Diogenes Laertius, 10.81; *Epistula ad Menoeceum*: Diogenes Laertius, 10.121–127; *Kyriai doxai*: Diogenes Laertius, 10.139; Lucretius, *De rerum natura*, 3.830ff., Cicero, *De finibus*, 2. 31. 101; Plutarch, *Non Posse*, 1103D, 1104E; Usener, *Epicurea*, 226–228. Cf. J. H. Neyrey, 125.n.23.

126. 魂の無限の存続や不死を想定したストア派はだれもいない。ストア派の正統的見解は、限られた期間の魂の存続である。A. A. ロング 著 金山 弥平 訳『ヘレニズム哲学 ストア派、エピクロス派、懐疑派』(京都大学学術出版会、2003年) 394頁註6を参照。さらに言えば、魂の実体は不滅であるが、個人の魂の「万物の大燃焼」(ἐκπύρωσις, conflagratio) を生き延びることができず、最終的には神的存在の中に吸収される、と考えられた。Cf. H. V. Arnold, *Roman Stoicism*, 263.

本的な死生観である。したがって神の審判も死者の復活も意味をなさない。

こうなるとパウロの演説に対する反応は、あまりはかばかしいものではないであろうことが予想されるが、実際のところ、アレオパゴスの聴衆はどのように反応したであろうか。

3 演説への反応 (17:32-34)

17:32

Ἀκούσαντες δὲ ἀνάστασιν νεκρῶν οἱ μὲν ἐχλεύαζον, οἱ δὲ εἶπαν, Ἀκουσόμεθά σου περὶ τούτου καὶ πάλιν.

死者たちの甦りと聞いたとき、ある人たちは嘲笑し始めた。しかし他の人たちは言った。「そのことについてまた改めて私たちはあなたから聞くことにしたい」

「しかし死者たちの甦りと聞いたとき」(Ἀκούσαντες δὲ ἀνάστασιν νεκρῶν)：パウロはイエスの甦りには言及したが、「死者たちの甦り」(ἀνάστασιν νεκρῶν)には言及していない。それにもかかわらず死者たちの甦りに言及するのは論理の飛躍であると思われるが、ルカとしてはそうまでしても死者たちの甦りの教説に話をもっていきたいのである。神による世界審判を布告した以上、後付けながら死者たちの甦りの教説を持ち出す必要があったわけである。

18節で見た、対話相手を是か非かの二つに分けるモチーフが、ここでも繰り返される。μὲν - δὲの対比に注目したい。「ある人たちは嘲笑し始めた」(οἱ μὲν ἐχλεύαζον)：[パウロ—対話相手]のレベルでは、エピクロス派哲学者たちの態度であろう。ルカの叙述ではエピクロス派は悪玉でありストア派は善玉である。したがって「他の人たち」(οἱ δὲ)はストア派哲学者たちということになるであろう。それにしても叙述の舞台からすっかり退散してしまったように見えたエピクロス派哲学者たちは、いつ戻ってきたのであろう。このあたりは叙述の構成の手際が悪いだけでなく、こういうやり方でエピクロス派哲学者たちを利用するのは、適切ではないようにも思われる。[ルカ—読者]のレベルにおいても、生かじりの知識をもった読者たちなら、この否定的な応答をしたのはエピクロス派哲学者たちであると考えるであろう。それにしても悪玉エピクロス派像を描き、それを嘲笑しているように思われるルカの姿勢は、エピクロスの観点からすると、あまり気分がいいものではない。

「他の人たちは言った。「そのことについてまた改めて私たちはあなたから聞くことにしたい」」(οἱ δὲ εἶπαν, Ἀκουσόμεθά σου περὶ τούτου καὶ πάλιν)は、柔らかな拒絶にとれないこともないが、ストア派哲学者たちはエピクロス派哲学者たちとは異なり、聞く耳をもっていたと解釈するほうが、ルカの叙述の構成に合致するように思われる。ストア派哲学者たちは条件付きで靈魂の不死は認めていたものの¹²⁶、死者たちの甦りとなるとにわかには受け入

れがたい。そこで、「また改めて」(καὶ πάλιν) さらに詳しく聞きたい要望を示した、という方向にルカは話をもっていったのだと思われる。この要望がすぐに叶えられたかは明示されていないが、そのようになった可能性は行間に含意されているように思われる。

17:33

οὕτως ὁ Παῦλος ἐξῆλθεν ἐκ μέσου αὐτῶν.

かくしてパウロは彼らの中から出て行った。

「かくして」(οὕτως)の中に、死者たちの甦りに関して行われた可能性がある「補講」が含まれているように思われる。『弁明』におけるソクラテスは、死刑判決を下された後、ソクラテスを支持する友人たちに向かって、死後の生について彼の楽観的見解をねんごろに語った¹²⁷。同様にパウロは、聞く耳のある何人かに死者たちの甦りについてねんごろに語った後、裁判者たちの中から出て行った。こういった含みが、この短い文言から読み取ることができるかもしれない。ストア派風ソクラテスに扮装したパウロは無知な人たちからは嘲笑されたが、真に知恵を愛する人たちからは支持を得た。そうルカは言いたいのもかもしれないが、彼が描くソクラテス劇がにわか作りであることはすでに露呈している。

17:34

τινὲς δὲ ἄνδρες κολληθέντες αὐτῷ ἐπίστευσαν, ἐν οἷς καὶ Διονύσιος ὁ Ἀρεοπαγίτης καὶ γυνὴ ὀνόματι Δάμαρις καὶ ἕτεροι σὺν αὐτοῖς.

しかしある人たちは彼に帰依しその信者となった。その中には、アレオパゴス議員のディオニュシオス、ダマリスという名前の女性、および彼らの仲間である他の人たちがいた。

「ある人たちは彼に帰依しその信者となった」(τινὲς δὲ ἄνδρες κολληθέντες αὐτῷ ἐπίστευσαν)は、とってつけたような話のように思われるが、二分法的叙述構成にこだわるルカにとっては不可欠な部分であろう。パウロに同調した人たちとは、哲学者たちの区分でいえば、ストア派哲学者たちということになるであろう。しかもその中のごく少数ということであろう。特別ゲスト登場というところであろうか。エピクロス派哲学者たちは、またもやすぐに退場させられている。「彼に帰依し」(κολληθέντες αὐτῷ)の、直訳は「彼にくっつけられた」である。

127. Plato, *Apologia*, 39E-41C.

パウロの教説と人物に強く引きつけられた、傾倒したということであろう。『弁明』の読者ならば、ソクラテスに熱く傾倒したクリトンやプラトンを連想するかもしれない。「その信者となった」(ἐπίστευσαν) とは、パウロ派の信奉者になったということであろう。その人たちはパウロのりっぱな演説に同調することができたからには、りっぱな人たちでなければならぬであろう¹²⁸。ディオニュシオスは、当時のアテナイにおける男性の名前としては最も一般的なものであり、演劇祭である市のディオニュシア祭を連想させる格調の高さを含意する用語でもある。ルカは、その読者に由緒あるギリシア文化を意識させるためにこの用語を選んだのではないかと思われる¹²⁹。ルカはディオニュシオスを「アレオパゴス議員」(Ἀρειοπαγίτης) と同定する。新約聖書では hapaxlegomenon である。「アレオパゴス議会あるいは法廷のメンバー」という意味であろう。エウセビオスの伝承によると、ディオニュシオスはパウロによってアテナイの司教に任命されたという情報を、コリントスのディオニュシオスが伝えたことになっている¹³⁰。紀元5世紀の新プラトン主義的神秘主義文書が、彼の名に帰せられたことは周知のことである。

「ダマリスという名前の女性」(γυνή ὀνόματι Δάμαρις) : 「ダマリス」(Δάμαρις) も、古風で詩的な δαμαρ 「配偶者(女性)」プラス -ις という女性名を現す接尾辞という語の形成から見て、ギリシア文化の伝統をただよわせる用語であり¹³¹、アレオパゴスに似つかわしい。おそらくルカはそれを意図しているものと思われる。「女性」(γυνή) は「妻」をも意味する用語である。そういうこともあつてか、ダマリスはディオニュシオスの妻であったという伝承もある¹³²。アレオパゴス議会・法廷は、通常アテナイの女性がいる場所ではなかった。彼女は、在留外国人で教養あるホステス(ἑταίραι) の一人であった可能性もあり、ルカはそれを含意しているのかもしれない¹³³。「彼らの仲間である他の人たち」(ἕτεροι σὺν αὐτοῖς) は、前二者と親密な関係にあつた教養ある人たちということになるであろう。彼らはともにパウロの「補講」を傾聴し、納得づくめで信者になったというところであろうか。演説のこのような結末は史実性なしとはいえないが、とってつけたような話の感は免れな

128. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 442; D. Gill, "Dionysios and Damaris: A Note on Acts 17:34," *Catholic Biblical Quarterly* 61 (1999) 486.

129. Cf. D. Gill, "Dionysios and Damaris," 490.

130. Eusebius, *Historia Ecclesiastica*, 3.4.10, 4.23;

131. Cf. D. Gill, "Dionysios and Damaris," 487.n.9.

132. Dio Chrysostom, *De sacerdotio*, 4.7; Cf. J. W. Childers, "A Reluctant Bride: Finding a Life for Damaris of Athens," *Renewing Tradition: Studies in Texts and Contexts*, ed. Mark W. Hamilton, Thomas H. Olbricht, and Jeffrey Peterson (Princeton Theological Monograph Series; Eugene, OR: Pickwick, 2006) 238.

133. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 442.n.161.

い¹³⁴。いずれにせよ、偉そうな人たちを引き合いに出すルカの手法は¹³⁵、俗物根性の現れにも見える。少なくともプラトンとエピクロスの観点からは、そう見えるであろう。

結論

「アテナイのパウロ」の叙述における[パウロ—対話相手]のレベルでは、ストア派的ソクラテス風パウロの独壇場である。彼は、知者とされる「エピクロス派・ストア派哲学者の幾人」(τινὲς δὲ καὶ τῶν Ἐπικουρείων καὶ Στοϊκῶν φιλοσόφων)を筆頭とするアテナイ人たちとの対話において、より正確には彼らへの演説において、彼らの無知を暴露し、キリスト教のありがたい教えを垂れる。その結果というと、演説の聴衆のほとんどは「無知の自覚」・回心に至らなかったが、聞く耳のある少数は回心に至ったという自画自賛の構成になっている。それでは使徒言行録執筆時における[ルカ—読者]のレベルではどうであろうか。生かじりの知識をもち、ルカのいうことをすべて正しいとする先入観をもつ読者ならば、ルカが好む色に塗り立てられたパウロ像なり「エピクロス派・ストア派哲学者の輩」像なりを、疑うことなく丸呑みするであろう。

他方、プラトンとエピクロスに関するいくばくかの知識をもつ読者ならば、ルカの叙述に対して異なる読み方をするかもしれない。まずルカが描くソクラテス的パウロ像についてであるが、プラトンのソクラテス像とは「似て非なり」である。表面をソクラテス風に粉飾したにすぎず、内実はキリスト教布告者そのものである。そのため叙述の中でしばしばメッキがはげ落ち、本性が現れる。そういう意味では、叙述の中のパウロは、ソクラテス化されたパウロから次第にパウロ化されたソクラテスに変容していったわけである。ルカが用いたソクラテスのイメージは、もっぱらキリスト教布告のための方便であり、プラトン哲学そのものへの関心を反映するものではないように思われる。

次にルカが描くエピクロス派哲学者像についてであるが、歴史の現実に存在したエピクロス派は明示的に反映されていない。というよりも反映する意図が、ルカにはないといったほうがよいかもしれない。ルカのエピクロス派理解は、いや理解というよりイメージはというほうが適切かもしれないが、巷に流布していた[エピクロス派=無神論者・快樂主義者]というステレオタイプな見方の域を出ていない。「エピクロス派・ストア派哲学者の輩」(τῶν Ἐπικουρείων καὶ Στοϊκῶν φιλοσόφων)という一括りの表現に、それが露呈している。エピクロス派哲学者たちは、叙述においてよく言えば引き立て役、実際は悪玉の役割しか与えられていない。彼らに対する理解や同情はみじんも感じられない。ルカは、キリスト教布告

134. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 442; D. Gill, "Dionysios and Damaris," 484.

135. Cf. R. I. Pervo, *Acts*, 442; D. Gill, "Dionysios and Damaris," 486.

のためにソクラテスのイメージを方便として便宜的に利用したのと同様に、エピクロス派哲学者たちをも方便として用いたのである。エピクロス哲学そのものを理解しようという姿勢は見当たらない。自説の正当化のためなら、自分が知ってもおらず知りたいとも思わない人物たちを、不確かなステレオタイプな知識に従って利用・悪用することをも辞さないルカの手法は、厳密な学問的観点からはあまり感心できるものではないが、それが一般に宗教というものの常套手段なのかもしれない。

A Philosophical Examination on Some Philosophical Flavors of Luke

— The Description of “Paul in Athens” in Acts 17: 16-34 —

MIKAMI Akira

KEYWORDS: Acts, Athens, Paul, Plato, Epicurus

This article is an attempt to deal with the description of “Paul in Athens” in Acts 17: 16-34 as one of Greek classical texts and to examine philosophically some philosophical flavors which Luke gives off in it, especially an image of Socrates-like Paul and an image of a stalking horse-like Epicurus. There may be an objection from the side of the Christian orthodoxy to this manner of dealing with a biblical text. However, insofar as Luke refers to philosophical matters, and that seriously, it is inevitable to respond to him philosophically. In short, this article has no apologetic intension. It is rather an investigation into how much Luke is able to endure the scrutiny by the pursuits of classics and philosophy.

For this purpose the above-mentioned text will be closely examined verse by verse. The expected results obtained from the examination will be as follows:

1. Luke’s image of Socrates-like Paul is portrayed in densely Stoic colors and is exclusively exploited for the apologetic and evangelistic purpose. He shows little or no interest in the philosophy in proper form.
2. Luke’s image of the Epicureans is a stereotype. They are merely given the backseat role of a foil or a ‘scapegoat’ in order to add spice to the supremacy of Christianity allied with Stoicism. There can be found no sign on the part of Luke to try to understand either Epicurus or the Epicureans.